

Contents

特集(1): 2012年、世界の選挙情勢	1p
特集(2): 台湾総統選ウォッチング	5p
< From the Editor > 干支で考える2012年	8p

いよいよ今年も押し迫りました。波乱の年であった2011年最後の号をお送りします。

以前から本誌が注目していた通り、2012年は「選挙の年」。4年に1度サイクルの米国、ロシア、台湾に、5年に1度サイクルのフランス、韓国の大統領選挙が重なる年。しかも中国共産党大会が行われて、新しい総書記と常務委員会が登場する年でもあります。

そこで特集その1は、「2012年世界の選挙情勢」。正体を明かしますと、12月19日発売号の『東洋経済』に寄稿した小文「世界で相次ぐ指導者選挙 政治経済はどう変わる?」に少々加筆(主要日程表と日本政治の部分)したものです。

それだけでは寂しいので、特集その2として「台湾総統選ウォッチング」を追加しました。1月14日の投票日を控えて、馬英九、蔡英文両候補の支持率は7p差(聯合報、12月3日)となっていますが、先週、台北にて現地取材した最新情勢を報告してみます¹。

いずれも来年を見通す参考資料となれば幸いです。

特集(1) 2012年、選挙の選挙情勢

欧州債務危機を見ていると、政治家が無責任で罪深い存在に思えてくる。逆にギリシャやイタリアで誕生した新首相のように、テクノクラート(実務家)のほうが知的で頼もしげに見える。しかるに、彼らテクノクラートは国民の信を得ていない。増税や歳出の削減など、痛みを伴う政策を断行するためには、やはり選挙で選ばれたという政治的正統性が必要になるだろう。

2012年は世界的に多くの選挙が行われる。それぞれの国民の選択はどうか。新しく誕生する指導者の品定めも興味深いところだ。

¹ 取材結果は、2012年1月9日午後10時からのテレビ東京『未来世紀ジパング』で放映予定。

<http://www.tv-tokyo.co.jp/zipangu/>

2012 年の主要日程

	国内	海外（：選挙、：国際会議）
1月	放射性物質汚染対処特措法全面施行 通常国会召集（上旬） 民主党大会（1/16） 自民党大会（1/22） プラグイン方式のプリウス PHV 発売 （1/30）	メキシコが G20 議長国に（1/1） デンマークが EU 議長国に（1/1） 台湾総統選、立法院選（1/14） 中国、春節（1/22～28） WEF ダボス会議（1/25～29）
2月	東京マラソン（2/27）	ギリシャ議会選挙（2/19）
3月	東日本大震災から 1 年（3/11） 環境省にエネルギー安全庁が発足	ロシア大統領選（3/4） ロシアが WTO に加盟 中国全国人民代表大会（上旬）
4月	熊本市が政令指定都市に（4/1）	仏大統領選挙第 1 回投票（4/24） 韓国議会選挙
5月	沖縄返還から 40 年（5/15） 日本国内で金環食（5/21） 東京スカイツリー開業（5/22）	仏大統領選挙第 2 回投票（5/6） 韓国麗水で万国博開催（5/12～8/12） G8 首脳会議（米シカゴ）
6月	住民税の扶養控除を廃止 原発がすべて停止に？	フランス議会選挙（6/10） G20 首脳会議（6/18～19 メキシコ）
7月	再生エネルギー特措法施行（7/1） 再生エネ全量買い取り制度始まる	ロンドン五輪（7/27～8/12） メキシコ大統領選・議会選 ASEAN 外相会議、ARF（カンボジア）
8月	全国戦没者追悼式	米共和党大会（8/27～30、タンパベイ）
9月	民主党代表選 自民党総裁選 JAL が再上場へ？	米民主党大会（9/3～6、ノースカロライナ州） APEC 首脳会議（9/8～9、ウラジオストック） 中国・中秋節（9/30～10/7）
10月	新日鉄住金が誕生（10/1） IMF 世銀年次総会（東京）	米大統領選の討論会（10/5, 16, 22） 生物多様性条約会議 COP11（10/8～11、印） 中国共産党大会（秋）
11月	世界遺産条約採択 40 周年記念会合 （11/6～8、京都）	米大統領選・議会選挙投票開票（11/6） ASEAN 首脳会議、東アジアサミット（プ ンペン） G20 首脳会議（メキシコ）
12月		韓国大統領選 Windows 8 発売？

中台海峡は波高し？露は「プーチン第 2 期」

年明け早々、1月14日に控えているのが台湾の選挙だ。史上初めて総統選と立法院選挙を同日選にしたところ、宋楚瑜という第三候補が登場して国民党の基礎票が割れた。馬英九総統の再選は怪しくなり、民進党の蔡英文候補が急迫している。

民主的な台湾総統選挙はこれで5回目。過去には中国のミサイル演習による恫喝、候補者狙撃事件などの波乱もあった。ところが2012年選挙は表向き穏やかである。もはや「独

立か、統一か」といった大テーマは争点とはならず、経済問題、それも「柿の値段が下落した」といった身近な事象が関心を集めている。

大陸側としても、台湾総統選を気にしているはずなのだが、2012年秋に共産党大会を控えた中南海は音無しの構えである。南京事件当日の野田首相訪中予定を断るくらい、内部は神経質になっている。

おそらく秋には予定通り習近平総書記が誕生し、胡錦濤に代わって中国の新たな10年を率いることになるだろう。しかるに共産党という毛布の中の乱闘は外からはよく見えない。新しい総書記のデビューは、2012年の国際政治における最大の関心事の一つであろう。

3月4日にはロシア大統領選挙が行われる。プーチンとメドベージェフの「タンデム(二人乗り自転車)政権」は、役割を入れ替えて「プーチン大統領、メドベージェフ首相」体制への移行を目指す。新憲法下では大統領の任期は2期12年まで。仮にプーチンがフルに2度目のお勤めを終えたとしたら、退任は24年でご本人は72歳となる。とはいえ、これで「プーチン大帝」の時代というわけでもなさそうだ。

2011年12月のロシア議会選挙においては、与党である統一ロシアがギリギリ過半数にとどまった。あのロシアでさえ今や強権政治は不可能であり、「ネット世論」の動向に一喜一憂しなければならない。

2012年のロシアでは、国民の機嫌を取り、議会対策にも心を配る「プーチン第2期政権」が始まるかもしれない。先行き不透明を恐れるよりは、「ロシアもやっと普通の民主主義国になった」ことを素直に歓迎すべきであろう。

「独仏枢軸」は持続可能か 雇用と財政で混迷の米国

フランスでは4月22日に1回目、5月6日に2回目の大統領選挙が行われる。しかるにサルコジ大統領の再選には、欧州債務問題が暗い影を落とす。このところ欧州で行われた選挙では、ことごとく政権交代が起きている。同じ運命が訪れるかもしれない。すでに下馬評では、フランソワ・オランド社会党前書記長の優勢が伝えられる。

その場合、メルケル独首相との息の合ったコンビはどうなるか。債務危機渦中の欧州では、「独仏が決めたことにどの国も逆らえない」不思議な状況が出現している。2012年の欧州は「独仏枢軸体制」の行方に注意が必要だ。

オリンピックイヤーには必ず米大統領選挙が行われる。オバマ大統領は、果たして2期目の権利をゲットできるのか。1年を通した長い戦いが行われることになる。

共和党の候補者選びは、アイオワ州党員集会(1月3日)、ニューハンプシャー州予備選(1月10日)を皮切りに、普通であればテキサスなど10州が参加するスーパーチューズデー(3月6日)ごろには決着するだろう。しかるに今回の共和党候補者選びは迷走気味であり、6月くらいまで決着が遅れる可能性もある。常識的にはミット・ロムニー元マサチューセッツ州知事で決まりだが、ニュート・ギングリッチ元下院議長などの勢いも侮り

がたい。

今回の予備選では討論会が重きをなしている。経済論戦が中心だが、「反ウォール街デモ」を重視するなら雇用対策が優先、「ティーパーティー」が猛威を振るえば財政再建が優先となるだろう。議論の行方はそのまま米国経済、ひいては世界経済の動向を左右する。

夏のロンドン五輪が終われば、共和党大会（8月27～30日）と民主党大会（9月3～6日）で正副大統領コンビが承認される。そこから先は一瀉千里で、投票日は11月6日となる。勝負の行方は景気次第といっても過言ではないだろう。

李明博政権 最後の1年 日本も「首相交代」？

李明博大統領の任期も最終年を迎える。今のところレームダック化を避けて、指導力を発揮しているのはお見事。ただし憲法が再選を認めていない哀しさ、4月の議会選挙、12月の大統領選挙へと韓国政局は「ポスト李」に向けて動き出すだろう。

米韓 FTA（自由貿易協定）批准に際して、反米旋風が吹き荒れた点が気になる。李政権で親米保守に振れた世論は、次期政権では再び反対側に振れるかもしれない。

最後に日本の政局にも触れておこう。このところ「首相交代」が年中行事になっている感があるが、野田首相にとって、2012年最初のピンチは3月末に訪れる。ねじれ国会の常として、毎度おなじみ「特例公債法案」の問題が浮上する。2011年は震災があったために、野党は強く反対できなかった。2012年は状況がかなり違う。与野党の溝は深いので、「予算を通してやる代わりに解散しろ」と要求を突きつけてくるだろう。

それを無事に切り抜けられたとして、第2のピンチは通常国会が閉幕する6月だ。2011年秋の臨時国会の法案成立はあまりにも少なかったが、翌年になっても状況は変わらない。冴えない実績を抱えた国会閉幕時、野党が不信任案を突きつける瞬間に、民主党内から造反が出るかもしれない。小沢一派の動きが不気味である。この場合、自民党だけでなく、身内から分かれた新党も相手に回した総選挙となるだろう。

そして 2012年9月には民主党代表選、自民党総裁選が相次いで行われる。内閣支持率が低ければ、民主党内から挑戦者が出るだろう。野田首相としては政権の安全運転に努め、代表として新たな任期を求めたいところ。仮に9月時点で民主・自民両党で新指導者が誕生した場合、「早く解散して国民の信を問え」という世論が高まるだろう。

つまるところ 2012年の政局は、麻雀で言うなら「三六九の3面待ち」リーチ状態。特に「六」で振り込むと高くつきそうだ。野田政権が解散に追い込まれる確率は5割程度か。総選挙となれば「勝者なき結果」が予想されるので、大連立や政界再編もあり得るだろう。

そうでない場合には、選挙のない1年となる。消費税法案が誕生した1988年、税率上げが決まった1994年は、いずれも衆参および統一地方選のない年であった。2012年も消費税が大テーマ。果たして「鬼の居ぬ間に…」と行くかどうか。

特集(2) 台湾総統選ウォッチング

12月22日の台北市。市内は至るところに選挙用看板やポスターが目立っている。選挙運動のクルマもたくさん走っていた。なにしろ今回は総統選だけではなく、立法院選挙も重なっているのだ。候補者の数がやたらと多いのだ。テレビのチャンネルを回すと、すぐに選挙関係の番組やCMを見つけることができるほどである。

進化する台湾の選挙戦術

市内で国民党本部と民進党本部を見学してきた。いつものことながら、台湾の選挙はサービス精神が旺盛で見ていて飽きない。5度目の民主的な選挙ともなると、選挙戦術も洗練されてくる。インターネットの利用もお見事で、ブログや映像を駆使するのはもちろんのこと、FacebookなどのSNSとも連動して支持拡大を目指している。

国民党本部：<http://www.taiwanbravo.tw/>



馬英九陣営のスローガンは、「台湾加油」(台湾ガンバレ：Taiwan Bravo)である。そこで文字通りの「加油」ということで、総統/副総統候補である馬英九/呉敦義ペアがガソリンスタンドの店員に扮している。「エリート臭い」「庶民の気持ちが分からない」と評され続けてきた馬英九総統が、ここまでくだけで選挙サービスに努めている。

国民党本部の建物は、その二人の巨大なポスターが描かれていて、中に入ると「選挙グッズ」を売っている。必勝アイテムは「台湾平安」と書かれたお守りである。2009年の大型台風など、落ち着かないことが続く世相を反映しているとのことであった。

民進党本部：<http://iing.tw/>



今度は民進党本部へ。蔡英文 / 蘇嘉全ペアのスローガンは「**現在決定未来!**」(Taiwan Next)である。民進党は2000年選挙で陳水扁政権を誕生させたものの、2期8年の政権への評価は芳しいものではなく、2008年選挙は大敗に終わった。捲土重来を期す2012年は、初の女性候補を立ててイメージの刷新を図っている。

こちらの**必勝アイテムは「こぶたの貯金箱」**である。党本部には小銭を入れたプラスチックの貯金箱が、台湾全土からなんと20万個以上も寄せられているという。金額は「不明」とのことだったが、会場の端ではパチンコ屋さんのような盛大な唸りをあげて小銭を集計しているところであった。とはいえ、金額の多寡はさほど重要ではない。人はもらった1万円のことはすぐに忘れるが、自分が払った千円のはなかなか忘れられない。有権者に投票所に足を運んでもらうために、少額の募金は有効な作戦なのである。

両者を見比べて気がつくのは、「**国民党は青、民進党は緑**」という従来のパターンが消えていることだ。国民党は青と赤を使い、米大統領選挙のような色合いになっている。今年が1911年の建国から百周年なので、市内の至る所に青天白日旗が掲げられているのだが、その旗の色合い(青、赤、白)を上手に利用している。ただし国民党に批判的な勢力からは、「国家予算を使って選挙運動に役立っている」との批判もあるようだ。

民進党側は“Taiwan Next”と書いた黄色の矢印が印象的だ。緑を使わないのは、「緑 = 独立派 = 陳水扁時代」のイメージから距離を置きたいと考えているのであろう。なにしろ陳水扁前総統は今も汚職問題による刑事被告人の身であり、その「負の遺産」は大きい。また民意の8割が「現状維持」を望んでいる中であっては、**中道派を取り込むためにも独立色を薄くした方がいい**。蛇足ながらこの作戦は、筆者には「鳩山・菅時代の反省から、低姿勢路線に努める野田首相」に重なって見えて仕方がなかった。

テーマはやはり対中関係

考えてみれば、「青か、緑か」という選択は、もともとは「統一か、独立か」を意味していた。台湾の選挙ではしばしば“Taiwan Identity”という重いテーマが争点になってきたのだが、今となっては大陸との統一を望む人はほとんどおらず、かといって独立を求めることにも疲れてしまい、「現状維持」以外の選択肢は考えにくくなっている。かくして米国などでは二大政党の党派的对立が強まっている中で、**台湾の選挙は「中道への歩み寄り」が基本戦略になっている**。まことに興味深い現象といえる。

かくして選挙の争点は内政問題となる。民進党系の台湾智库(Taiwan Thinktank)が発行しているパンフレット今年4月号に、「六問馬總統」(馬總統に聞く6問)という特集号がある²。表紙には6人の若い男女が「税制」、「就業」、「社福」(社会福祉)、「住宅」、「教育」、「環境」のプラカードを掲げている。「外交」や「安全保障」といった文言は見当たらない。

² <http://www.taiwanthinktank.org/chinese/page/6/66/2020/0>

こんな風に、選挙のテーマが生活に身近なもの（Pocketbook Issue）になることは、普通に考えれば「争点の矮小化」、もしくは「情けない」という評価になるのだろう。しかし台湾においては、これこそが民主主義（もしくは二大政党制）の成熟なのかもしれない。「無党派層」を自認する蔡錫勳准教授（淡江大学日本研究所）は、「総統選挙はこれで5回目。政権交代も2回やった。次はもうどっちが勝っても大丈夫」と語る。ある意味でこれは、日本以上に進んだ状態とは言えないだろうか。

経済政策という面では、2010年の台湾のGDP成長率は10.7%もある。国民党を支持する経済界からは、「リーマンショック後の経済危機を、こんなに上手に乗り切った例はない」との賞賛の声がある。ただし、それで生活水準が上がったかと言えばそうでもない。民進党支持者の側からは、「若者の就職先がない」「格差が拡大している」「産業の空洞化（大陸への進出）が起きている」「農村が疲弊している」「少子・高齢化が進んでいる」などの批判がある。この辺はまったく日本と同じ、というより先進国共通の悩みといえよう。

特に意見が分かれるのは、2010年6月に導入されたECFAへの評価である³。事実上の中台FTAであるこの合意は、途上国である中国側がより多くの譲歩を行い、先進国である台湾側がメリットを得るという不思議な性質を持つ。ECFAのお陰で、台湾経済が潤っていることは間違いないだろう。また中国との関係改善により、台湾はシンガポールやニュージーランドとのFTA交渉を開始し、日本とも投資協定を締結することが出来た。

ただしECFAを契機とする大陸経済との関係緊密化は、同時に「中国に呑み込まれる」との恐怖感も煽る。台湾智库の陳博志所長は、「こんな関係は長くは続かない。安定した関係には相互の協力が必要だ。中台関係は日米関係とは違う」と指摘する。なるほど言われてみれば、ECFAには「毒まんじゅう」的なところがある。今回の選挙で問われるのは、つまるところ馬英九政権の対中関係強化に対する是非ということになるだろう。

ところで台湾のこのような選挙情勢は、中国からはどのように見えているのか。次期総書記と目されている習近平は、若い頃にアモイ市副市長、福建省長など台湾と関係の深い地域を担当してきた。当然、台湾問題には精通しているはずである。共産党大会を控えた微妙な時期の中南海において、台湾の政治情勢が問題化することは容易に想像がつく。

他方では、台湾が民主的な選挙を行い、なおかつ米国やロシアなどでも大統領選挙が相次ぐ来年、中国で新たに登場する総書記が「民意を得ていない」ことは嫌でも目を引くだろう。国際社会は言うに及ばず、中国国内でもそのような不満が高まらない保証はない。なにしろ世界で新しい指導者が多く誕生する中で、「中国と北朝鮮の2人の総書記だけは別」ということになってしまうのだ。

つくづく民主主義は台湾の命綱である。1月14日の選挙には是非、ご注目願いたい。

³ Economic Cooperation Framework Agreementの略で、貿易、投資、サービスなどの自由化推進を盛り込んでいる。「台湾は国ではない」という建前から“framework”という妙な言葉が入っているが、実態は限りなくEPA(Economic Partnership Agreement)である。

< From the Editor > 干支で考える 2012 年

2012 年の干支は壬辰（みずのえ・たつ）である。

十干のうちの【壬】は、陰陽五行では「水」性の「陽」に当たり、海洋や大河の水を象徴する。転じて豊かさや楽観性を意味するが、ときには洪水のような強引さにも通じる。「壬」という字は腹の膨れた糸巻きを象形しており、「ハラ（妊）む」に通じ、草木の内部に新しい種子が生まれた様子を指す。

末尾に 2 のつく「壬」年は、経済面で新しい動きが始まる年が目につく。2002 年は小泉政権下で、外需主導による「いざなぎ超え景気」が始まった。1992 年はバブル崩壊後の不況が本格化し、『複合不況』がベストセラーになった。1982 年は 80 年代の大型景気の出発点であり、1972 年は田中内閣の「日本列島改造論」に全国が沸いた。2012 年はどんな現象が始まる年になるだろうか。

十二支のうちの【辰】（たつ）は、陰陽五行では「土」性の「陽」に当たる。「振るう」の意味で、陽気が動き草木が伸長する状態を表している。動物としては「龍」（竜）が当てられている。「雲をおこし雨を降らせ、春分には天に昇り、秋分には淵に隠れる」という、十二支では唯一想像上の動物である。

過去の辰年を振り返ると、「辰巳天井」という相場格言通り、よし悪しが極端に分かれる。2000 年はハイテクバブルの頂点。1988 年は日経平均が 3 万円台乗せ。1976 年はロッキード事件などの政変と景気回復が共存し、1964 年は東京五輪開催で証券不況の年だった。要は「登竜門」や「画竜点睛」もあるが、「竜頭蛇尾」や「逆鱗に触れる」もある。ボラティリティが高い年と心得たい。

先の【壬申】（みずのえ・たつ）は 1952 年である。サンフランシスコ条約が発効して日本は独立を回復したものの、血のメーデー事件、破防法成立、保安隊発足と国内は不穏であった。エリザベス 2 世が即位したが、英国はスエズ動乱で威信が傷ついた。ヘルシンキ五輪では「人間機関車」ザトベックが活躍し、戦後初参加の日本は金メダル 1 つだけ。羽田空港が開港し、電電公社が発足した。手塚治虫が『鉄腕アトム』の連載を開始し、黒澤映画『羅生門』がアカデミー特別賞を受賞し、将棋界では大山康晴が名人になって木村義雄が引退した。

2011 年は「3/11」震災にユーロ危機、アラブの春など既成秩序に動揺が走った。2012 年は新体制や新秩序が始まり、新しいスターが登場する年であってほしい。戸堂康之東大教授によれば、日本には「臥龍企業」が多く存在するという。それらを世界に飛躍させる元年としてみたいものである。

2011 年はつくづく大変な年でありました。来年こそは良い年としたいものです。

皆さま、どうぞよいお年をお迎えください。

* 次号は 2012 年 1 月 13 日（金）にお届けします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問合わせ等は下記にてお願いします。

〒107-8655 東京都港区赤坂6-1-20 <http://www.sojitz-socket.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4945

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com